

海老名市門沢橋・厚木市戸田

## 戸田の渡しを訪ねる

日時 2019年9月28日(土)

集合 茅ヶ崎駅改札前 8時50分

行程 茅ヶ崎駅—相模線—門沢橋駅下車—①浄久寺—②渋谷神社—③正覚寺—④「門沢橋」—⑤道標・大山不動石仏—(昼食)—⑥戸沢橋を渡って厚木市戸田へ—⑦戸田の渡しの碑—⑧福蔵院—⑨八幡神社—⑩延命寺—バス停でバスに乗り平塚駅へ(解散)

その他 資料代として会員200円、会員外300円を集めます。



— 連絡 — 山本俊雄 090-6174-2806 尾高忠昭 090-3241-0775 平野文明 090-8173-8845

会員募集中

(13~15 頁は後ろから読んで下さい)

## 門沢橋村

現在の海老名市南部に位置し、相模川左岸域を JR 相模線が南北に通過している。東西には県道 22 号線（長後街道、柏尾通り大山道）が通っている。地名の由来は地域を北東から南西に流れる永池川が、相模川と合流する河口にあたることからといわれ、河口に架けられた橋が門川橋と名付けられ、それが門沢橋に転じたと言う。

明治以後の来歴を簡単に記すと、

明治 22 年（1889）町村制施行により、高座郡有馬村大字門沢橋となる。

昭和 30 年（1955）有馬村が海老名町と合併し、海老名町の大字となる。

昭和 46 年（1971）海老名町が市制施行し、海老名市となる。

『新編相模国風土記稿』（以下『風土記稿』と記す）によれば、「海老名郷の下方に在るをもって海老名下郷と号す、民戸 96、東西 11 町（約 1200m）、南北 9 町半（1036m）、東は本郷村（海老名市）、南は倉見村（寒川町）、北は中野村、本郷村、西は相模川を隔てて大住郡戸田村（厚木市戸田）に接する」とある。

また、街道は二、東西に貫くものが大山道（幅 2 間〈3.6m〉当村継場から東の方用田村〈藤沢市〉へ 30 町〈3.3km〉、西の方戸田村へ 18 町〈約 2km〉）、南北に通ずるのは八王子道、幅 9 尺〈2.7m〉」とあり、当時から柏尾通り大山道の方が広くメインストリートであったことが解る。

相模川についても「幅百間余（約 180m）、平常の水幅は 80 間ばかり（144m）で、高さ 3 尺（約 1m）の堤が設けられ、渡船場があり、戸田渡しと言われ、船 2 艘を置き、対岸の戸田村との共同の持ちで、大山道に掛かっている」（以上は門沢橋村の項。戸田村には「河原とも幅六、七町」「渡幅一町（108 間）許」とある）と書かれている

### ① 浄久寺 海老名市門沢橋 4 丁目 11-1

『風土記稿』に次のようにある。

長谷川山隆崇院と号す。浄土宗〈増上寺末〉、本尊阿弥陀仏〈座像長一尺七寸（約 51cm）春日作〉、開山然譽知全〈元和三年（1617）二月十九日卒〉、開基長谷川筑後守政氏〈法諡、長清院空譽浄久、寛永十五年（1638）九月二日卒〉

浄久寺には 2 件の海老名市指定文化財がある。その一つは平安仏といわれる、本尊の木造阿弥陀如来坐像である。境内に立つ市教育委員会設置の説明板には次のようにある。

平成十七年五月十八日指定 海老名市指定重要文化財  
浄久寺 木造阿弥陀如来坐像

この木造阿弥陀如来坐像は、浄久寺の本尊として長谷川正成が寄進したと伝わる仏像です。

平成七年（一九九五）の海老名市史編纂仏像調査により平安時代後期（十二世紀）の定朝様の仏像であることが初めて明らかになりました。

像高は五十二・一センチで割矧ぎ割首造、眼には後補の玉眼が入っていますが、元は彫眼と考えられています。丸く穏やかな面相、ゆったりとした体、浅く調べられた衣表現など平安時代後期に興隆した定朝様式の特徴がよくでています。一部後世に補修されているものの海老名市内で確実に確認されているものとしては最古の仏像であることから市指定文化財となりました。

平成十七年十二月 海老名市教育委員会

『海老名市史 7』684 頁は「この本尊は、門沢橋村の領主、長谷川氏の寄進と言われるが明らかではない。」としている。長谷川家の長谷川平蔵は池波正太郎の小説「鬼平犯科帳」のモデルになっている。

もう 1 件の指定文化財は、領主長谷川家代々の供養塔である宝篋印塔であり、境内にある市教育委員会設置の説明板に次のように記してある。

平成十七年五月十八日 指定

**海老名氏指定重要文化財 浄久寺 長谷川家石造宝篋印塔群**

寛永二年（一六二五）に幕府旗本の長谷川正成（まさなり）が門沢橋村を所領地として与えられたことから、浄久寺が長谷川家の菩提寺となりました。以来、幕末まで長谷川家代々の当主とその家族が葬られて、墓塔として宝篋印塔が建立されてきました。

台座に被葬者の没年代と法名・俗名が刻まれており、長谷川正成以降、正岳（まさたけ）まで八人の当主とその家族が葬られたことがわかります。

別の寺院に葬られた記録のある人の名前や、複数の名前が刻まれたものがあること、長谷川正成が門沢橋村を所領地とする以前に亡くなった人の名前も見受けられることから改葬等の際に建立された宝篋印塔もあると考えられています。

宝篋印塔は、江戸時代に幕府旗本の墓塔としてよく用いられ、江戸時代中期（十七世紀）には盛んに造られました。このため、数基単位で建立されている例はよくありますが、大形のものを中心に十五基もの宝篋印塔が建立されている例はあまり多くありません。

また、市内でこれだけの数の宝篋印塔が現存しているのは浄久寺だけであることから市指定文化財となりました。

平成十七年十二月 海老名市教育委員会

## ② 渋谷神社（江戸時代は神寿〈かんじゅ〉稲荷と呼んだ）

『海老名市史 7』（通史編・近世・2001年海老名市刊）645頁に次のようである。

「鎮座地は門沢橋字稲荷町。村のメインストリートである柏尾通り大山道に面しており、当社の社前には高札場があった。祭神は「寒川名神ノ御支枝」の加牟之由之命〈かむのいわれのみこと〉加牟之由比古命〈かむのいわれひこのみこと〉とも、倉荷魂命〈うかのみたまのみこと〉ともいう。当社は下海老名郷（現在の社家・中野・門沢橋のあたりか）の総社であり、門沢橋村の鎮守であった（『鷹倉社寺考』）。平安時代末期の寿永年間（1182～83）に渋谷庄司重国が当社を造営し、嘉禎3年（1237）に渋谷又太郎が鎌倉郷の稲荷を合祀したと言われるが（『社寺考』）、史実かどうかははっきりしない。かつて下海老名郷は海老名氏の支配地であったが、下海老名郷の史料上の初見は文永元年（1264）とされるので、それ以前に神寿稲荷に渋谷氏が関係していても矛盾はしない。近世でも門沢橋村は、名前だけ残っていた渋谷庄の一部であった。

近世の棟札二枚が現存する。寛保元年（1741）十二月のものには「新造立」、天保九年（1838）二月のものには「再建」とある。当社の別当寺は寛永五年（1628）創建の長谷川氏の菩提寺の浄久寺ではなく、より古い正覚寺であることや、供鐘が延宝七年（1679）の鑄造であることなどから、寛保元年の「新造立」は創建ではなく、全面的再建を意味すると思われる。（以下略）

### 境内にある海老名市教育委員会設置の説明板の解説

#### 海老名市指定重要文化財

#### 渋谷神社 本殿 平成十五年四月三十日指定

渋谷神社は江戸時代に神寿（かんじゅ）稲荷（稲荷社）と称し、旧門沢橋村の鎮守であった。現在の渋谷神社に名称を改めたのは、明治七年である。江戸時代の延宝七年（一六七九）鑄造の鐘を鐘楼にかけていたので、その成立は同時代初期に遡ると思われる。勧請の年代は不詳であるが、古社であることは間違いないと思われる。

本殿は、間口四尺の間社流造り（いっけんやしろながれづくり）の建物で、覆殿内部に安置されている。建築年代は、本殿内にある棟札から、寛保元年（一七四一）と推定される。また同じ棟札から、作者が地元の工匠であることが判明している。

母屋は、正面両脇の小壁に上り龍や下り龍の彫物をはめ、頭貫（かしらぬき）の木鼻（きばな）は、正面を獅子と猿（ぼく）の彫物、背面は象鼻と絵様木鼻である。また中備（なかぞなえ）には、草花を彫ったかえる股を置くなど、小

規模な建物ながら、彫物装飾を効果的に用いた造りになっている。

当本殿は、斗供（ときょう）の形式、虹梁（こうりょう）の絵様や、木部と彫物すべてに当初から彩色が施されている点など、十八世紀の中ごろの特徴をよく示しているうえ、保存状態も良い。また、当時としては彫刻を多く用いるのは珍しい。

以上のように、本物件は十八世紀前期の標準的な遺構として貴重であり、保護の価値があると認められるため、市指定重要文化財に指定したものである。

平成十六年九月 海老名市教育委員会

### ③ 正覚寺 海老名市門沢橋4丁目13-13

『風土記稿』門沢橋村の項に「橋沢山延命院と号す、古義真言宗」あとある。

『海老名市史7』682頁は『社寺考』を引いて次のように延べている。

開山開基不詳。寺伝に曰く。明和年中(1764～71)正覚寺光雅当寺創建と伝う。按ずるに前稿加牟之由明神がことと不合せざること多し。光雅は中興の僧なるべし。万治二年(1659)の稿本に橋沢山延命院正覚寺と記し開基不詳と記すと、万治期に開基不詳の記録があることを根拠に、明和期は創建ではなく、再興であるとしている。

#### 境内にある海老名市教育委員会設置の説明板の解説

##### 海老名市指定重要文化財

##### 正覚寺 本尊 木造十一面観音菩薩坐像 昭和四十九年四月二十三日指定

本尊の木造十一面観音菩薩坐像は、像高四八・五寸の寄せ木造り、玉眼嵌入です。肉身部は金泥、条帛・衣文などは黒漆塗りです。頭上には仏面、化仏の十一面を据え、左手に蓮華のつぼみの入った水瓶を持ち、右手は、願をかなえる与願印で垂下しています。

江戸時代に編纂された『風土記稿』には、鎌倉時代の運慶作と記されていますが、実際の制作は江戸時代前期ころと考えられています。ただし、作風は、中世の仏像を手本としており、まとまりの良いものとなっています。

昭和五十四年に解体修理を行い、残された特徴をもとに、ほぼ創建当時の姿に復元されました。この復元の際に、像内から（木造十一面観音坐像・一木造）が発見されました。平成七年に実施された海老名市仏像悉皆調査によれば、その作風は、本尊よりも遡る室町時代後期ころの作とされています。

平成拾六年九月 海老名市教育委員会

#### 宝篋印塔

境内本堂前にある。見上げるほどの高さで、明和4年(1767)建立 天保9年

(1838)再建。

#### ④ 門沢橋と地名の由来

現地に「門沢橋」という名の橋がある。原川（永池側の支流）に架かる小さな橋である。

また、門沢橋駅に立つ地図板には永池川に架かると示してあるがこちらは実見していない。

両方の橋は数百メートルしか離れていない。実際に同じ名の橋が二つあるものか、あるいは地図板の図が間違っているか。

『角川日本地名大辞典』14 神奈川県 の 249 頁にある門沢橋の解説の「地名は永池川が相模川に合流する河口に位置することに由来し、この河口に橋が架けられて門川橋と称し、転じて美唱の門沢橋になった」という説は何に由来するか書かれていないこともあるが、理解しがたい。

#### ⑤・⑦ 戸田の渡し





『海老名市史7』569頁以降にこの渡について次のように記してある。

『風土記稿』に、船2艘を置き、当村と対岸戸田村の両村持ちとある。

江戸時代の門沢橋村は二つの街道に沿って多くの家が立ち並んでいた。屋号に人馬の継場を思わせる「立場」や「木村屋」「富田屋」「桐屋」「柏屋」等があり宿場を思わせる街であった。

毎年6月末に始まる大山の夏の例大祭は、6月27日に始まり7月17日まで続く(『相中留恩記略』卷之八)。門沢橋村の渡船場は、その前日から賑わっていた。戸田の渡し場は簡単な作りで、渡船賃を受け取る会所は戸田村側にあった。渡船賃は「寛保元年」(1742)の神部舜一家文書でも「宝暦十一年」(1761)の厚木市小塩家文書(『厚木市史近世資料編』(2)資料68-(5))でも旅人から定額一人12文とある。但し武士は無料であった。

船は、戸田村との組合持ちで馬船(まぶね)1艘・歩船(ほぶね)1艘で渡河していた(寛保元年神部舜一家文書)。船の大きさは、馬船は長さ7間~7間半(12.6~13.5m)横幅9尺(2.7m)、人は40人程乗ることができた。歩船の大きさは馬船と同じ位で人は50人程乗ることができた(『茅ヶ崎市史』1)。但し、同じ文久2年(1840)の厚木小塩家文書では「歩引小船水主式人乗り」とも出てくるので、歩船の大きさは少し小振りだったかもしれない。

渡船用の船は、時には物資の輸送にも使われた。神部舜一家文書に、年紀不詳の「平田船 下り米貳拾石四斗 上り同十貳石、渡船歩船 下り米拾石 上り同六石」という文書がある。上りと下りでは物資の輸送量が2倍近く異なることが興味を引く。

戸田の渡しは、当初戸田村一村の業務であったが、寛永18年(1641)頃に門沢

橋村が助郷を始めてからは両村で業務を行っていた。毎年2月下旬に、会所や渡し場の崩れている所を修理し、渡船場を開く準備をする。冬の間は、恐らく他の渡船場同様に土橋などを用いていた。渡船場の監督は、戸田村の船守大支配人が行い、彼が指図しなければ何も出来ないくらいの強い権限を持っていた。仕事の内容は、会所の修理、大水の後の川瀬や船着き場の修理などであった。船守大支配人は、中戸田村（戸田村中分武田領）の名主級の有力農民から出すことになっていた。その下に下戸田村（戸田村下分岡部領）から船渡下支配と呼ばれる副役が出た。中戸田村と下戸田村の関係は、税負担や収益、船の修理でも中戸田村は2/3で下戸田村が1/3の負担という定めであった。但し、戸田村と門沢橋村の関係では五分五分の定めなので、全体から見ると中戸田村は1/3、下戸田村が1/6となる（『厚木市史近世資料編』(2)資料68）

宝暦11年（1761）の文書（前掲書資料68-(5)）によると、門沢橋村には水斗（かこ）仲間が26人いた。水斗とは、「水斗仲間人申候地方名主三左衛門」とあることから船頭ではなく渡船場株（職業上の特権）の所有者である。水斗仲間を束ねる水斗仲間世話人という役職があった。渡船場株は相当の収益があったようで、質草にもなった。天保5年（1834）には下戸田村の四郎左衛門は渡船場株一株で八郎右衛門から金3両借用している。

渡船場の収益は両村で折半されたが、門沢橋村には不利だったと思われる節がある。宝暦11年（1761）の文書によると、相模川の流路が二筋になった時、門沢橋村では名主以下渡船場を引き分けて、一瀬ずつ船賃を取るなど利権を別けようとする動きが出ている。もちろん戸田村は一瀬でも二瀬でも戸田村の渡船場であると異議を唱えている。この出入りについては、大住郡馬入村で船宿を営む吉右衛門が扱人（仲裁人）となって、馬入川の例式の通り、つまりこれまで通りに行うよう内済（示談）している（『厚木市史近世資料編』(2)資料68-(5)(6)）。

幕末の攘夷運動の高揚の中で外国人襲撃事件が起きると、幕府は、近隣の村々に対して横浜表別段取締という警戒体制を取ることを命じた。多摩川・相模川・その外の見張小屋を関東取締出役の手で強化した（『神奈川県史』通史編3）。

安政7年（1860）の「相模川筋渡船場往還道見張番屋御請書帳」（相模原市・鈴木家文書）によると、戸田・門沢橋両村渡船場、厚木・川原口・中新田三か村渡船場を含めた相模川の7カ所の渡船場に対して「川西岸へ繋ぎ置き、東岸へ見張り番屋補理（しつらい）、最寄り番非人へ申し付け交代番致させ、平日きつと相守らせ、村役人ならびに組合大小惣代のもの時々見回り、且横浜表急変の節は通達これあり次第、右詰場村々え触れ知らしめ急速人数差し出し村役人付き添い嚴重に取り締まり仕り候」とあり、寄場組合単位で見張番屋を作っていたことが解る。



## 門沢橋側にある海老名市教育委員会設置の説明板 ⑤

(大山道が相模川に接する少し手前、不動明王坐像の大山道標のそばにある)

戸田の渡し跡

市南部の本郷から門沢橋にぬける大山道は「柏尾道」ともいわれ、往時門沢橋付近で「戸田の渡し」により相模川を渡船した。「戸田の渡し」では船二隻を常備していた。門沢橋はかつて旅籠、茶屋などがあり、賑わいのある宿場であった。また、安藤広重もこの地を訪れ、「相州大山道中戸田の渡し」の浮世絵を制作している。

平成4年3月13日 海老名市教育委員会

## 戸田側にある厚木市設置の標柱 ⑦-1

(戸沢橋の少し南側、堤防の端にある)

戸田の渡し

柏尾村(横浜市戸塚区)から長後を経て船で相模川を渡り戸田村へ入り下糟屋を過ぎ大山に至る大山参詣柏尾道の要衝で、戸田・門沢二村の経営であった。安藤広重はここで「相州大山道中戸田之渡」を書いている。

昭和五十九年二月 厚木市

## 戸田の堤防上にある渡し場の碑の説明 ⑦-2

戸田の渡し

相模国風土記稿に源頼朝の妻政子が、大山の不動尊や日向薬師に安産の祈願をしたという記述があることから、この戸田の渡しは、鎌倉時代にはすでに武家の大山詣りや米の運び道として利用されていたと推察される。この渡しは、用田・長後方面から下津古久・落合を通り大山へ通ずる大山詣柏尾道の要衝であり、江戸時代の有名な浮世絵師の歌川(安藤)広重によって画かれた「相州大山道中戸田川之渡」には、多くの人々がこの渡しを利用している当時の様子が窺える。戸田村と門沢橋村の両村が船二艘で経営した戸田の渡しは、川が氾濫する度に渡船場の位置が変わったが明治の末まで盛んに利用された。

## ⑥ 戸沢橋〈厚木市・海老名市〉

『角川日本地名大辞典』14 神奈川県 625 頁には次のように説明されている。

相模川に架かる橋。主要地方道路横浜伊勢原線が通過。厚木市戸田と海老名市門沢橋を結ぶ。昭和42年竣工。横長526m・幅員8m。九径間連続鋼鈹桁橋で、耐震性を重視した構造を持ち、橋内部に下水管を通して。古くから戸塚から用田を経て戸田の渡しを渡る大山道が通じていた。昭和5年、横長445m・幅員4.5mで架橋されたが、増水のため流失し、再び渡船となって

いた。昭和28年頃、平常流水の幅に長さ140m・幅2mの鉄筋コンクリート橋が架設されたが、出水時には水面下に没し、交通不能たびたびであった。現在の橋は、国道129号および主要地方道藤沢厚木線から新道を開き架橋したもので、6年の歳月で完成したが、のち両側に歩道をつけた。

### 戸沢橋の両端にある欄干の標柱にある説明

戸田の渡し

この渡しは大山道の一部であり江戸の昔より門沢橋村と戸田村のあいだ 渡し巾百十メートルほどを庶民の足 また物資の輸送用として明治の末まで盛んに用いられた。

(注 「渡幅110<sup>程</sup>」は『風土記稿』戸田村から取った数値と思われる。)

### ⑧ 福蔵院 厚木市戸田 1032

『風土記稿』戸田村の項に次のようにある。

福蔵院 仙壽山無量光寺と号す。宗派前に同じ(成就院浄土宗)。〈武州多摩郡瀧山大善寺末〉。寿永二年(1183)の起立という。開基行阿(事跡等詳らかならず)。本尊三尊弥陀。

本堂に隣接する墓地に、厚木の豪家小塩家の墓地があり、その中の一つの墓塔は、茅ヶ崎柳島の藤間家から小塩寛蔵の嫁となった幾為(きい・柳庵の孫)のものである。

〈墓塔正面〉

顕正院天質貞鏡大姉

〈向かって左側面〉

藤間氏名幾為相州高座郡柳島邸善左衛門二

女弘化二年(1845)十月十日生資性貞淑而有婦徳元

治元年(1864)二月嫁同州中郡相川邸小監寛蔵善教

子女賑恤窮乏内助之功亦居多矣大正七年(1918)十

一月二十八日病没□三日葬之享年七十有四

### ⑨ 八幡神社 厚木市戸田 1057

『風土記稿』戸田村の項に次のようにある。

八幡宮 鎮守なり。例祭八月十五日。社地、相模川の辺にありしが、大水のとき度々崩れしにより、文政十一年(1828)十一月、別当寺(延命寺)境内に移す。社領八石の御朱印は慶安二年(1649)八月賜うところなり。

境内に石仏が置かれている。

サイノカミ（道祖神）はコンクリートの覆い屋のなかに集めてあり、年銘を欠く双体像塔、嘉永5年(1852)銘の文字塔、文化9年(1812)銘の疱瘡神などがある。

拝殿の脇には明治8年(1875)建設の「地主神」、寛文4年(1664)銘をはじめとする庚申塔数基などがある。地主神は神社敷地を寄進した人を、地主として祭ると刻されている。

## ⑩ 延命寺 厚木市戸田 1099

『風土記稿』戸田村の項に次のようにある。

延命寺 戸田山普賢院と号す〈万治三年(1660)院号を免さる〉。古義真言宗〈平塚新宿等覚院末〉。千手観音を本尊〈古は江ノ島上ノ宮護摩堂に安んぜしを、後ここに移せし由、蓮華座に記せり〉とす。

### 境内にある厚木市教育委員会設置の説明板の解説

厚木市指定有形文化財

木造菩薩立像 二躯 平成十三年十一月十六日指定

延命寺の本堂内本尊両脇に安置される菩薩立像で、両像は一組とみられ、三尊像の脇侍であったと考えられますが、明確な尊名は不詳です。また、延命寺は一五二五(大永五)年の創建と伝えられますが、本像はそれよりはるかに古く、元々の安置場所などは明らかではありません。

平成十二、十三年に全面解体の文化財修理が行われ、造立当初の像容に近づけた形で修復されました。

両像は、通常の菩薩像の形をとるもので、頭に宝髻(ほうけい)を結び、上半身に条帛(じょうはく)、下半身に裳(も)を着ける姿につくられています。一木造りで彫眼、像表面は修理後、古色仕上げを施してあります。

両像間には多少作風の違いはありますが、共に優しい顔立ちや、全体の穏やかな肉付け、浅く彫られた衣文など、一般に藤原様と呼ばれる平安時代後期の特徴をよく示しています。作行きは地方作としては洗練性もあり、まとまりのよい出来となっています。

制作時期は、十二世紀と考えられます。

平成十四年三月 厚木市教育委員会

(以上 山本俊雄・平野文明)

とだ 戸田〈厚木市〉

富田とも書いた。相模平野のほぼ中央部、相模川下流の右岸に位置する。地名の由来は、美田を称して富田と書いたものが変化したとも考えられる。

〔中世〕富田郷 南北朝期～戦国期に見える郷名。相模国愛甲郡のうち。戸田とも書く。文和2年7月2日の関東管領畠山国清奉書写に「鶴岡八幡宮両界供僧信濃法印重弁申、相模国戸田郷内〈淵辺弥五郎跡〉事、任去年観応三年四月廿三日御寄附状之旨、可被沙汰付于重弁代之状、依仰執達如件」と見え、当郷内の淵辺弥五郎跡が観応3年4月23日鶴岡八幡宮に寄進され、この時河越弾正少弼に沙汰付が命じられている（鶴岡等覚相承両院蔵文書／県史資3上-4235）。室町期成立の「鶴岡両界壇供僧次第」にも「観応二（三カ）年〈四（月）廿三（日）〉、相模国富田郷三分一、為両界壇所料所賜之」「文和二癸巳相州戸田郷三分一、為両界壇所料所賜之」と同様の記載が見える（続群4下）。その後、当郷は応永33年6月25日に「鶴岡両界料所」として再寄進された（相承院文書／県史資3上-5759）。下って、戦国期には弘治2年3月8日の北条家朱印状写に伊波氏の知行分として「百九拾壹貫五百文 富田」と見える（相文／同前3下-7000）。「役帳」にも、小田原北条氏諸足軽衆伊波某の所領役高として「三拾九貫六百文 中郡富田・小柳、百五拾貳貫文 同所癸卯増」と見え、この中には天文12年検地の増分が含まれていた。しかし、年月日未詳の池田指南寄子書立写に「一、伊波一跡可相続者無之間、寄子与知行二ニ書分」と見え、その後伊波氏が断絶したため、伊波氏の知行地は池田氏の支配下に入った（同前7001）。天正9年7月24日の北条家着到定書によれば、「百卅一貫六百文 中郡富田・小柳之内」は池田孫左衛門尉の知行地となっていた（小田原市立郷土文化館所蔵／県史資3下-8644）。

〔近世〕戸田村 江戸期～明治22年の村名。相模国大住郡のうち。寛永10年旗本岡部氏・小河氏・牧氏・須田氏・佐藤氏知行と幕府領、元禄10年旗本岡部氏・小河氏・牧氏・須田氏・佐藤氏・安藤氏知行、幕末には小田原藩領と旗本岡部氏・安藤氏・小川氏・須田氏・武田氏・牧氏知行。枝郷に小柳村がある（元禄郷帳・天保郷帳）。村高は、寛文年間の三郡高帳（県史資6）で先高968石余、「元禄郷帳」678石余、「天保郷帳」690石余、「旧高旧領」979石余うち小田原藩領11石余・岡部氏知行300石・安藤氏知行209石余・小川氏知行47石余・須田氏知行11石余・武田氏知行300石余・牧氏知行90石余・八幡社領8石。なお天正19年の岡部昌綱への知行宛行状に「大住郡戸田村之三百石」と見える（記録御用所／県史資8上）。「元禄郷帳」「天保郷帳」には当村の枝郷として村高300石余の小柳村が見える。当村の集落は上戸田・中戸田・下戸田・下沖に分かれるが、このうち上戸田を小柳村と称したという（新編相模）。なお戦国期の「役帳」には小柳の地名が見える。「新編相模」によると、江戸から15里、東西8町余・南北14町余、家数131軒、地内を大山道と富士山への道および平塚宿からの八王子往還が通り、人馬継立を行う。また渡船場が相模川にあり戸田渡しと呼ばれ地内中ほどには大用水とおなが堀・堺堀と称される悪水堀がある。鎮守は八幡宮、また下戸田の天満宮・小柳の子安明神社・沖小柳の若宮八幡宮・下沖の御霊権現社・下沖の鉾明神社もそれぞれの鎮守となっており、ほかに白山社・稻荷社・山王社・熊野社・神明社・社宮神社がある。寺院は浄土宗善養

院・同宗成就院・同宗福蔵院・曹洞宗桃源山浄明寺・同宗小柳山東泉寺、ほかに地蔵庵と号す庵がある。小田原藩領は明治4年小田原県から足柄県を経て、同9年神奈川県に所属。旗本知行地は明治元年神奈川府を経て神奈川県、同4年足柄県、同9年からは再び神奈川県に所属。同22年相川村の大字となる。

〔近代〕戸田 明治22年～現在の大字名。はじめ相川村、昭和30年からは厚木市の大字。明治24年の戸数136、男436人・女430人。昭和50年の世帯数627・人口2、580。

とだのわたし 戸田の渡し〈厚木市・海老名市〉

厚木市戸田（旧戸田村）と相模川対岸の海老名市門沢橋（旧門沢橋村）とを結んでいた渡し。保土ヶ谷宿と戸塚宿の中間、下柏尾村から大山への順路であった。「新編相模」戸田村の項は「渡幅一町ばかり、当村及対岸門沢橋二村にて進退す」とある。船2艘が置かれていた。安藤広重も戸田の渡しを描いている。この地の架橋は昭和5年で、同48年現在の戸沢橋が完成している。

かどさわばし 門沢橋〈海老名市〉

相模平野のほぼ中央部、相模川左岸に位置し、地内を永池川が流れる。永池川はもと永池堀と称し、大化開田に伴う人工運河でかつては相模国庁に通じた（長寿会記）。地名は永池川が相模川に合流する河口に位置することに由来し、この河口に橋が架けられて門川橋と称し、転じて美唱の門沢橋となった。

〔近世〕門沢橋村 江戸期～明治22年の村名。相模国高座郡のうち。寛永10年・元禄10年・幕末ともに旗本長谷川氏知行。寛永2年の長谷川正成宛知行宛行状に「高座郡門沢橋村四百拾弍石」が見える（記録御用所／県史資8上）。村高は、「元禄郷帳」421石余、「天保郷帳」「旧高旧領」とも502石余。検地は天正19年彦坂元正が実施。名主は左藤・神部両家が世襲した。「新編相模」によれば、江戸から12里、東西11町半・南北9町半、家数96軒、鎮守は稻荷社、寺院は浄土宗浄久寺、地内を南北に八王子往還が、東西に大山道が走り、大山道は相模川を当村と対岸戸田村持ちの船2艘を置く戸田渡しでつなぐ。また当村は大山道を東の用田村へ30町、西の戸田村へ18町の人馬継立てを行うと同書にある。夏場は大山詣の人々でにぎわいをみせ、旅宿・茶店・菓子造り・紺屋・雑貨荒物その他半農半商の家が軒を並べた。地内南東部は湿田だったが、北東部は乾田で良質の米を産し、文政年間頃からは農間期を利用して養蚕が行われるようになった。明治元年神奈川府を経て神奈川県に所属。当村鎮守稻荷社は同5年頃神仏分離令により別当正覚寺の支配を離れ、渋谷神社と改称した。同22年有馬村の大字となる。

〔近代〕門沢橋 明治22年～現在の大字名。はじめ有馬村、昭和30年海老名市町、同46年からは海老名市の大字。明治24年の戸数94、男292人・女287人。大正13年戸数107・人口466人、昭和5年戸数121・人口605、同55年世帯数950・人口3,424。はじめ主要産業は米・麦生産、養蚕・石垣イチゴ栽培を経て、昭和30年頃より温室・ビニールハウスにて花卉・果物を作る。特にイチゴは相模イチゴ・有馬イチゴとして京浜間に出荷、好評を得た。昭和8年相模鉄道（国鉄相模線）門

沢橋駅を開設。同40年代に入り主要地方道横浜伊勢原線の改修と戸沢橋の開通に伴い通過車両の増加とともに商店・食堂、倉庫業・中小企業が進出し、同50年後からは住宅・人口が急増。昭和48年有馬小学校門沢橋分校が門沢橋小学校となる。

○門澤橋村 加登左八 波志牟良 江戸より十二里、海老名下郷と號す  
 海老名郷の下方 民戸九十六、東西十一町半南北九町半 東、本郷  
 に在を以唱へり  
 村、南、倉見村、北、中野村、本郷村、  
 西、相模川を隔て大住郡戸田村、 檢地は天正十九年彦坂小  
 刑部元正糺し、寛永十二年十月再檢地あり、今長谷川太郎  
 兵衛正岱知行所なり 寛永二年十二月、先 祖筑後守正成賜る、街道二東西に貫く  
 もの大山道なり 幅二間、當村繼場にて東の方用田村へ三十 町、西方戸田村へ十八町、人馬を遞送す、南  
 北に通ずるは八王子道なり 幅九 尺  
 ○高札場一 ○小名 △原 △橋戸 △跡堀 △入内島  
以智久 志木 △下毛 △馬場  
 ○相模川 西方を流る 幅百間餘、平常 水幅八十間許、堤を設く 高三 尺 ○渡  
 船場 相模川に在、戸田渡と唱、大山道の係る所なり  
 船二艘を置、對岸戸田村と當村の持、  
 ○稻荷社 神壽 加牟 之由 稻荷と號す、村の鎮守なり、△末社  
 太神宮 △鐘樓 鐘は延寶七年の鑄造、△しげノ木  
 神木なり、周廻一丈八尺、△別當正覺寺 橋澤山延命  
 院と號す、古義眞言宗 岡田村安 樂寺末 本尊十一面觀音 長一尺 二寸、  
運慶作、則稻荷 の本地佛なり、 △藥師堂 ○山王社 六月十五日祀る  
 正覺寺持下並同、○若宮太神宮 祭禮六月十六日、  
 ○天滿宮 祭禮二月二十五日、

○淨久寺 長谷川山隆崇院と號す、淨土宗 增上 寺末 本尊彌陀  
 座像長一尺 七寸春日作 開山然譽知全 元和三年二 月十九日卒 開基長谷川筑後守政  
 氏 法謚、長清院空譽淨久、寛 永十五年九月二日卒、 ○笠松 大山道より南の方  
 名主三左衛門が庭中に在、五葉なり幹圍六尺許、東西  
 八間南北十間許に盤旋す、

く村内に併入せり、△中戸田 △下戸田 △下沖

○相模川 東界にあり、河原共幅六七町、水除堤あり、高五尺、又中堤と唱へし堤もありしが、文政中洪水の時崩れて今僅に残り、四十間許存す、○渡船場 相模川にあり、大山道の係る所なり、戸田渡と呼ぶ、渡幅一町許、當村及對岸高座郡門澤橋村二村にて進退す、○大用水 村の中程にあり、幅六尺餘、又おんが堀・堺堀と唱ふる悪水堀二所あり、是も幅六尺許、

○八幡宮 鎮守なり、例祭八月十五日、社地相模川の邊にありしが、大水の時度々崩れしにより文政十一年十一月、別當寺境内に移す、社領八石の御朱印は慶安二年八月賜ふ所なり、△別當延命寺 戸田山普賢院と號す、萬治三年院號、古義眞言宗、平塚新宿、等覺院末、千手觀音を本尊は古すを免さる、江ノ島上ノ宮護摩堂に安せしを、後爰に移せし由、蓮華座に記せり、とす、△天滿宮 小名下戸田の鎮守なり、例祭八月廿五日、延命寺持、下同、△鐘樓 寛文十年の鐘をかく、○子安明神社 字小柳の鎮守、例祭九月朔日、△鐘樓 寛政六年の鐘なり、○若宮八幡宮 字沖小柳の鎮守、例祭前に同じ、△鐘樓 天保六年の鐘を掛く、△末社 金毘羅 ○御靈權現社 小名下沖の鎮守、祭日八月二十八日、覆屋内に稻荷山神を置、○鉾明神社 是も下沖の鎮守なり、例

祭八月二十八日、酒井村一重院持、○白山社 村民持、下同、○稻荷社 ○山王社 延命寺持、○熊野社 村民持、下同、○神明社 ○社宮神社

○善養院 下沖山大住寺と號す、淨土宗、芝増上寺末、文祿元年十一月、地頭小河三益、境内の地を寄附す、享保七年、小河甚左衛門の寄附狀を藏す、文祿の寄附狀は小河惣左衛門の家にあり、開山淨譽一吟、卒年月詳ならず、三尊彌陀を本尊とす、△辨天社 △天滿宮 ○成就院 無量山發願寺と號す、本寺前、本尊彌陀、○福藏院 仙壽山無量光寺と號す、宗派前に同、武州多磨郡瀧山、壽永二年の起立と云、開基行阿、事蹟等詳ならず、本尊三尊彌陀、○淨明寺 桃源山と號す、曹洞宗、大神村眞芳寺末、本尊地藏、○東泉寺 小柳山と號す、本寺前、本尊藥師、△水神社 △白山社 ○庵 地藏庵と號し、即ち地藏を本尊とす、村民持、

○戸田村登太牟良

舊くは富田とも通じて書せり、古淵邊源

五郎某が領地なり、文和元年四月鶴岡八幡宮、兩界領に

附せらる鎌倉鶴岡等覺院文書曰、鶴岡八幡宮、兩界供僧信濃法印重辨申、相模國戸田郷、淵邊源五郎跡事、任去年觀

應三年四月廿三日、御寄附狀之旨、可被沙汰付于重辨代之狀、依仰執達如件、文和二年七月二日、河越彈正少弼殿、修理大夫

華押、按ずるに、修理大夫は京都管領斯波高經なるか、其後一色刑部大輔持家の所領

となりしが、持家甲州の凶徒退治として發向の時、祈禱

の爲再兩界領とす鶴岡相承院文書曰、鶴岡兩界領所、相州富田郷事、返進之候也、仍今度甲州進發凶徒

退治之御祈念無御等閑候者、□□目出候、恐々謹言、六月廿五日、相承院法印御房、持家華押、按ずるに、應永三十三年、武

田右馬介信長退治として、持家甲州に發向の事あり、此時なるべし、弘治の頃は北條氏の臣、

伊波大學助・同修理亮等知行す石田村農民所藏文書曰、伊波

文、富田云々、弘治二年丙辰三月八日伊波大學助殿・同修理亮殿、虎朱印、【北條役帳】にも伊波

氏知行たりし事見ゆ曰、伊波三十九貫六百文、中郡富田、小柳は今村内の字なり、又癸卯は天文十二年なるべし、永祿十二年八月武田信玄、小

柳は天文十二年なるべし、又癸卯は天文十二年なるべし、

田原表働の時、當所に陣取れり【甲陽軍鑑】曰、八月信玄公模川を左に當て、かね田、つま田、あ

つぎ、岡田、戸田に陣どりたまう、天正の頃池田孫左衛門北

氏家、領せし事所見あり廣川村民所藏文書曰、池田孫左衛門百三十一貫六百文、中郡富田、小柳之内、

云々、天正九年巳七月二十四日池田孫左衛門殿、虎朱印、江戸より十五里、民家百三十

一東西八町餘南北十四町餘東、相模川に限、高座郡門澤橋。倉見二村、西、郡中大神。下津古

久二村、南、大神今御料元田沼主殿頭意次が領分な及武田大

膳大夫信典寶永三年先世拜賜す、岡部庄左衛門ならず、下同、安藤九郎

左衛門保敬・牧丹波守義珍・小河惣左衛門益利御入國の頃拜賜す、

須田大隅守盛昭拜賜の年代詳ならず、等知行す、大山及駿州富士山

への道長後通と唱ふ、あり、又東海道平塚宿より武州八王子道も係れり、共に人馬の繼立をなす澤橋村へ十八町、西、

下糟屋村へ一里、八王子道は南、田村へ一

里、北、愛甲郡厚木村へ一里を繼送れり、

○高札場四 ○小名 △上戸田此内に小柳及沖小柳と稱す

田小柳と記せしは此所なり、正保國圖には小柳村と載せ、別

村とす、【元祿圖】に、戸田村枝郷と傍記を加へたり、今は全